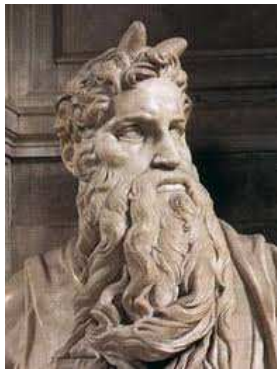


## 旧約聖書を読んで感じること(29) 申命記(3)「呪いを受ける」

もし、あなたたちの神、主の戒めに聞き従わず、今日、わたしが命じる道をそれて、あなたたちとは無縁であった他の神々に従うならば、呪いを受ける。(申11:28)



Michelangelo (c. 1513-1515)

モーセの篤い信仰は「神の祝福」を感謝するだけでなく、「呪い」という、恐ろしい言葉まで引き出してしまいました。律法のなかに様々な禁止事項があり、忌むべき行為があり、死に値する罪が定められていますが、さらに「呪い」という表現が記されています。「啓示」という宗教的な表現があったのに、「呪い」という呪術的な言葉も使われていて、驚きます。「呪う」とは「禍があるように神に祈る」ことですが、モーセはそんなことはしなかったでしょう。むしろ、とりなして祈ったと思います。



Marc Chagall

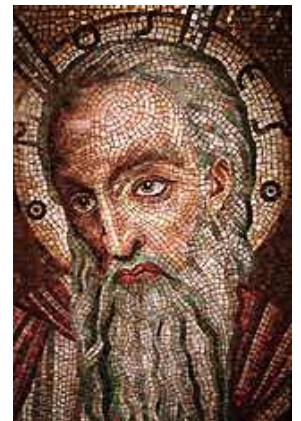
モーセは「呪われる」という言葉を「滅び去る」という意味で使っています。呪われる者のリストが 27 章にあります。これは律法を守ることが出来ない民への警告と見なしていいでしょう。律法違反への罰を現実的に与えることが難しくなったこと、また、違反行為があったかどうか、罪にあたるかどうかを正しく裁くことは祭司にも難しいことだったのででしょう。「呪い」の具体的内容は28章にリストが載っていますが、生殖不能、不作、疫病、悪天候、病気、皮膚病、精神病、孤立無縁、飢え、渇き、欠乏、困窮、災害など、ありとあらゆる不幸が襲いかかると言うのです。聖書には時代的制約があることが、ここでも明白です。

シナイ山から下ってきた時、モーセの顔の肌が光を放っていて、民は恐れて近づけなかった(出 34:29)とありますから、神の光を受けたモーセのオーラは神々しくて、民は恐れ、罪を深く意識させられたでしょう。けれども、モーセの真意は、神が身近におられることを覚えよというものでした。



Jusepe de Ribera

わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。(申 30:11-14)と再度、励ましているのです。



Cathedral Basilica of St. Louis

犯罪に対しては法により裁きが行われ、罪があれば罰を受け、罪を償います。目に見えない罪に対しても、罪を犯すのが人間の偽らない姿であれば、罰という観念にとらわれ、誰でも罰を恐れ、裁きから逃げたいと願います。また、罪が産む結果も現実的に見聞きしています。

「裁き」に関して、私はイエス様の次の言葉に頼っているのです。

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。(ヨハネ3:19)

「闇の方を好む」、この生き方が裁きであると言っておられます。永遠の罰とか、地獄の罰という言葉に怯えますが、今生きている時、「光」を求めるようにモーセのオーラが促しているのかもしれない。